

袴田巖さん再審無罪！



山口県本部版

NO. 313

治安維持法犠牲者

国家賠償要求同盟

山口県本部

〒753-0051

山口市旭通り1-2-3

電話/FAX

083(934)3567

『検察は控訴するな』『再審法改正を』

国民救援会が全国一斉宣伝

【写真】山口検察庁前で訴える救援会の人たち(10月4日)

◆十月一日、石破茂首相が誕生しました。首相は当初の主張を覆し十月九日衆院解散、十五日公示、二十七日投票で逃げを図ろうとしています。苦しい生活、後退する福祉に国民の我慢は限界を超えました。自・公を過半数割れにするため奮闘しましょう。

◆九月十八日、同盟山口県本部総会を開きました。林洋武会長が健康面の不安と高齢で勇退されました。二十四年間県本部を引っ張っていただきありがとうございました。今後は名誉会長として執筆活動に専念していただきます。

新役員

会長 なし

副会長 中村鈴枝(再)

事務局長(会長代行兼ねる) 大田智美(再)

理事 小川ふさ子 小川静生 岡藤和代 北村るみ

松富昭子(以上再) 三谷弘子(新)

会計監査 浅田旭弘(新) 中村祥晴(再)

◆十月十四〜十五日島根県で行われる同盟の中国ブロック交流集會に山口県から八名が参加します。

◆十一月十日〜十二日愛知県蒲郡温泉郷で同盟の全国女性交流集會が開かれます。

◆同盟県本部の十一月度役員會議は十一月十三日午後一時三十分から共産党県委員会で開きます。

◆同盟の国会請願署名は九月末で七十九筆です。

今も生きている河上肇の足跡

その7

河上肇記念会全国世話人 加藤碩(ひろし)

河上は、すでに五十四歳を超え

ていて、体調は必ずしも良かった

わけではないし、今まで書齋や大

学という比較的に恵まれた社会

的地位で生活してきた人ですか

ら、やっぱりこたえた、牢屋の中

の日々がこたえたのです。それで

「獄中独語」というものを書く。

この「獄中独語」は、提出すると

すぐほとんどの新聞社が全文を

発表します。(一九三三年七月七

日付け)その内容は、実践からは

身を引くが、自分が到達した学問

の真理を棄てたわけではない、と

いうものです。理論的到達点まで

曲げろ、と権力側は当然迫るわけ

ですが、そこは承知しない、しか

し一種の転向に近い文書が出来

上がってしまうわけなんです。

「共産主義者として検挙され

た私が飽くまでかかる者として

生存しようとするれば、私にはただ

獄中生活のみが残される。再び自

由を得ようとするれば、早かれ遅か

れ私は共産主義者としての資格

を自ら放棄せねばならぬ。かうい

うことは最初から分かりきった

ことであり、またこういう場合に

共産主義者のとるべき態度につ

いても私は十分に承知していた

つもりである。老残の身を牢獄に

埋めることは、かねての覚悟であ

った。」

「共産主義者たる資格を自ら

放棄することは、共産主義者の自

刃である。それは共産主義者とし

て許されるべきではないが、私は

再び自由を得んがため今敢えて

之を犯すについて、首をたれて罪

を同志諸君の前にまつ者である。」

「私は今後実際運動とは一合

法的のものたる而非合法的のも

のたるをとを問わず—全く関係
をたち、元の書齋に隠居するであ
ろう。これが私の現在の決意であ
る。私は今かかる決意を公言して
之に社会的効果を賦与すること
に於いて、共産主義者としての自
分を自分自身の手で葬るわけ
ある。」

「誤解を避けるために一言し

ておくが、以上のことは、勿論マ

ルクス主義の基礎理論に対する

私の学問上の信念が動揺したこ

とを意味するものではない。ふつ

つかながら、かりにも三十年の水

火をくぐってきた私の学問上の

信念が、僅か半ヶ月の牢獄生活に

よって早くも動揺を始めると云

うことは在り得ない。書齋裡に隠

居した後も、私は依然としてマル

クス主義を信奉する学者の一人

として止まるであらう。しかし、

ただマルクス主義を信奉すると

云うだけでは、マルクス主義者で

も共産主義者でも在り得ないの

だ。」

「以上の一文を以て自らを葬
るの弔辞となし、同時にまた自ら
を救う呪文となさんがため、これ
を市ヶ谷刑務所内の監房に独座
して認めた。時に昭和八年七月
二日なり。」

概略以下のような文章を書い

て、結果として天下に知れること

となつたのです。

これに対して、「『獄中独語』—

秀夫人の憂慮」としましたように、

秀さんはこれはまずいと思う。面

会に行つて「刑務所の中ものを

お書きになるのは、およしになつ

た方がよくはないですか」とたし

なめます。獄中で権力側からの差

し金でこんな文書を書くことは、

「転向への道になるし、彼自身の

これまでの生き方も、学問的な良

心も全部ないがしろにしてしま

うことになる。それではたしてい

いのだろうか」と考えた、きわめ

て賢明な助言だった。

河上肇は「なに心配することは

ない。良心を売るようなことは断

じてはしないよ」といって、書いてしまったわけです。しかし、これは奥さんの忠告が正しくて、実態として生きていました。

戦前の弾圧というものはひどいもので、結局彼の期待に反して、『獄中独語』の提出にもかかわらず、執行猶予のつかない五年の実刑が確定します。そんな状況でも「早く出たい、出たい」と思いますが、何回も同じような権力への屈伏の衝動が、起こります。その度にいろいろと忠告をして、たしなめた、秀さんの苦勞があったようです。

第四章

『獄中独語』に対する

日本共産党の見解

当然にも、当代一級のマルクス経済学者のこの『獄中独語』は大きな反響を広げることとなります。

当時の日本共産党は、八月一日付の「アカハタ」に声明を発表して、河上肇の名をあげて「敗北的

分子」「巧妙なる遁辞によって敗

北主義を合理化し、それによって敗北主義的気分を促進し、幾多の動揺分子を敗北主義に誘導競争

もの」として党から除名する措置を取りました。当時の党としての決定は、当然のことでありました。

河上肇の獄中の一連の問題に

ついては、日本共産党の元中央委員

会常任幹部会委員であった小

林栄三さんが、一九七七年十月に

「河上肇生誕百年記念講演会」で

講演したなかに、比較的くわしく

そして正確に評価されています。

（小林栄三著「歴史を先駆けた

人々」所収）

この小林さんの著作から紹介

をさせていただいて、日本共産党

としての見解を明らかにしてお

きたいと思えます。

著作では、「赤旗」八月一日付

の声明を紹介した後次のように

述べています。

「同時に、なによりも糾弾され

なければならぬのは、河上肇を



出獄後半年、昭和13年1月(東京) 前列は長女と次女の孫たち。後列右は妻の秀さん(当時54歳)

向(マルクス主義経済学の真理そのものをも否定に追い込み、学問的良心さえ放棄させようとする)への様々な工作が行われたことを紹介しつつ、秀さんの愛と情のこもった励ましによって、河上が刑期を全うしたことを説明して、次のように結んでいます。

「こうして河上肇は、よりいっその転向を表明させようとする反動勢力のその後の策動には乗じられることなく、満期出獄の前後の日記には『河上肇万歳、マルクス主義万歳』と書き込んだのでした。こうして河上肇は、転向という重大な誤りを犯しましたが、マルクス主義そのものの放棄は口にしないというぎりぎりの一線に踏みとどまり、また日本共産党を攻撃する佐野、鍋山らとは大きくことなつて、日本共産党こそ時代の光明であり、そこから離れる方が正しくないのだとする考えをいだきつづけたのです。」

私の戦争体験 北朝鮮の難民であった頃(10) 林洋武

脱出の相談 七〇里の道をどう歩くか

春になるとニセアカシアの花が咲きます。とげのある灌木ですが植民地政策として朝鮮に奨励して飢えられました。この白い花は甘みのあるものでした。量は少なくとも毎朝子供らは必死に花を取りに行きとげで体中傷になりながらもしばしの飢えをしのぎました。蛇や蛙も子供達に狙われました。私はやんちゃの子供でもあったので特に蛇を捕まえるのが上手でした。串刺しにして七輪のうえで焼きだすとお母さんたちは気味悪るがっていました。そのうちに争うように蛇や蛙をとるようになりました。ノビルや松のうす皮なども口にしました。ただ治安は幾分安定してソ連兵たちを取り締まるために憲兵が駅前の中所に配置され子供達は遊びに行きました。ソ連兵の中に女性兵士が二名ほどいて私たちに優しくしてくれました。彼らの黒いパン(フレーブといいました)やひまわりの種をわけてくれました。ソ連兵はひまわりの種をいつも口にしていてペツペと皮をはき出していました。春になっても事態は変わらず強制収容所の中の不自由な過酷な生活が続きました。

父の釈放 脱出の計画

絶望の中で突如父が帰ってきました。あの洪タイホが「見

つかったのは武器でない。迫撃砲と手投弾の飾り物だ」と証人に立ってくれました。懲役三か月で釈放になりました。と同時に順安の権力の中心であった保安隊長洪タイホの失脚が伝えられました。北朝鮮で体制の整備が行われ始めていました。洪タイホはクリスチャンでないかという噂がありました。順安にはキリスト教の教会がありました。病院も学校もありました。戦争が始まる前にアメリカ人の宣教師や医師は帰国して教会も学校も板で釘づけさられていました。父の証人になったせいもクリスチャンだったせいもわかりませんでした。

大人たちは歩いて38度線まで脱出することにしました。当時七〇里をどうやって赤ちゃんからお年寄りまで逃げるのか連日の協議と準備が始まりました。満州からの避難民は男の人がほとんどおりませんでした。それは敗戦の直前に満州の男の人に招集令状がかかりみな軍隊にかり出されていきました。私たちのそばに高齢のおばあさんと女の子二人と母親という家族がいました。しかもおばあさんは足が悪くトイレに行くのも大騒ぎでした。この家族をどう連れていくのか役員の人と協議がつづきました。結論はむごいものでした。捨てました。餓死させることにしたのです。最後は別の部屋に連れていかれましたが思い返すも残酷です。

(つづく)